

私と郷土と文学 ②

岩井俊二監督の映画「ラストレター」を観た。泉、白石、一番町と見知った背景が映してあって引き込まれる。今風にスマホが小道具として使われていたが、違うのは手紙。今やEメールの世の中なのに手紙。てがみ。

100万人の年賀状展終了

1月10日から2月11日まで、恒例となった新春ロビー展「100万人の年賀状展」(仙台文学館主催、仙台文学館友の会共催)を開催した。今年で18回目。

元号が変わって初めてのお正月ということで、干支のねずみの絵柄とともに「令和」と書道や貼り絵などで表したものを、昨年の流行語「ワンチーム」という言葉を...

ラストレター

が好き、妹は主人公が好き。主人公から頼まれたラブレターを妹は姉に渡さず、主人公と姉の恋は実らなかつた。別の人と結婚した姉は、うまくいかず鬱病で自死したのだ。

大阪、三重、広島などからも届いた。新春のすがすがしさの中で、小さな紙面にしたためた言葉の交流を楽しむ参加型企画として、今後も続けていきたい。

訃報 鮎貝盛秋さん

元会長の鮎貝盛秋さんが令和元年11月15日に逝去されました。鮎貝さんには、友の会発足の平成11年から21年まで会長をおつとめいただきました。



第62号

令和2年3月20日発行

新年度は「作家・編集者 佐左木俊郎」でスタート

2020年度展示 冬は「佐野洋子の世界」

2020年の春は企画展「作家・編集者 佐左木俊郎」農村と都市 昭和モダンの中でスタートします。

夏休みの「こども文学館えほんのひろば」では、宮城県在住の児童文学作家・佐々木ひとみ、野泉マヤ、堀米薫の各氏による児童書「みちのく妖怪ツアー」の展示を開催。

秋の特別展は「働きマン」「ハッピー」。



佐野洋子 ©JIROCHO, Inc.

マニア」などの作品で知られる漫画家・安野モヨコの展示を開催します。女性の本音や悩み、ファッション、時代の空気、美意識などを盛り込み、深い共感と高揚をもたらす作品を描く安野モヨコ。

風と歩こう

北根二丁目からせつせと歩く。文学館の門を入る頃には、コートの前を開けたくなる。見上げれば、丘の上の赤松は日向ぼつこの真つ最中、縁側に座ったお婆さんのように、時々フツと揺れている。



Photo by Ryuji Sasaki

足音が変わった。一歩一歩、足に伝わる感触も変わる。なんとなく柔らかい。橋はまっすぐに伸び、その先の坂道になる。下を見ると、小川の岸辺は針葉樹の落ち葉がフンワリと積もっている。

編集後記

仙台文学館友の会会報「文学の杜」第62号をお届けします。

▽高御座(たかみくら)の一般公開を見てきた。装飾の煌びやかさ、工人の技に圧倒された。人の波に押されての見学だったけどコロナウイルスが大事になる前でもよかった。

▽先日美容院で読んだ女性週刊誌、内容が変わってきたと感じた。エステとファッション関係のCMが多いのは同じだが、働く女性に役立つ制度や社会問題の深掘りなどもあり、読み応え十分だった。

▽流行は繰り返す。女性のスカート丈がまた長くなってきた。20年以上もしまいこんでいた紺色のオーバーを取り出し、この冬何度も着た。暖かい。丈が長いと、赤いハイヒールもテラズに履けるのもうれしい。

毎年決まる芥川賞と直木賞、芥川賞作品は総合雑誌「文藝春秋」に掲載される。先日近くのスーパーの雑誌コーナーにも置かれていた。目にした瞬間、数年前に逝った文章サークルのKさんの声が聞こえた。

「芥川賞作品の載った雑誌買いましたか?私買ってもう読んだので回しますから、まだなら買わないでください」

文友一滴

所属していたサークルに私より少し後から入会したKさんは、私の住所が、障害のある娘さんが長年通った施設の近くと知り「とても懐かしかった」と電話をくれた。

Kさんと本や文章作りを通して交際したのは15年以上にわたる。出会ったときの明るさは最後まで変わらなかった。

友の会随想

平成二十二年、友の会で知り合った三人が、詩歌の朗読と音楽を通して、人と人の間に虹を架けよう、と始めた「朗読サロン 虹の街」を、平成二十九年十一月二十三日の「希望の鐘」を最後に終了することになりました。

「朗読サロン 虹の街」を振り返って

会員 菊田郁朗・田中きわ子・渡辺仁子

となく、内容やトークを通して、何をメッセージとして伝えるかということでした。その後、いろいろ議論を重ねながら、第一回は、風のうたがきこえる(菊田著

本大震災が発生、被災地の惨状を前に、ごことはどんな意味をもつのか、という大きな疑問に直面しました。しかし、ことばは伝えることによって意味をもつ、と考えれば以後はこの震災とどう向き合うかが大きなテーマ(柱)になりました。

第五回、彷徨する言葉(中国の詩人田原)。第六回、沈黙の海(TBCアナ藤沢智子)。第七回、ふるさと(歌手さとう宗幸、詩人水月りの、伊藤美菜子、写真家大沼英樹)。第八回、うたのころ(うたのいのち)震災を超えて(歌人佐藤通雅)。

極寒の収容所に生きる

ソルジェニーツイン 「イワン・デニーソヴィチの一日」

極寒のソ連で8年間収容された著者の、収容所の1日を綴ったものである。零下27度の寒さに宿舎の中にすら下がるという住環境、毎日の戸外での重労働、仲間内の密告。あまりの空腹に他人の血まで舐めてしまうことがある、配られたパンは一度に食べずに寝床のマットの中に隠して

第44回読書会 哀しみと充足、ひたむきな愛のかたち

川端康成「雪国」 「国境の長いトンネルを抜けると雪国であった」というフレーズで始まる小説である。文筆家島村は、ひとり東京から列車でこの雪国の温泉場にやって来た。馴染みの芸者駒子に会うためだった。気まぐれとも言える駒子の行動や言葉の裏にあるのは、妻子ある島村への抑えきれない愛。美しい声を持つ葉子の愛は...

次回読書会は4月8日(休)14時 古山高麗雄「プレオー8の夜明け」(講談社文芸文庫) ※友の会会員は自由に参加できます。申込みは友の会事務局まで。

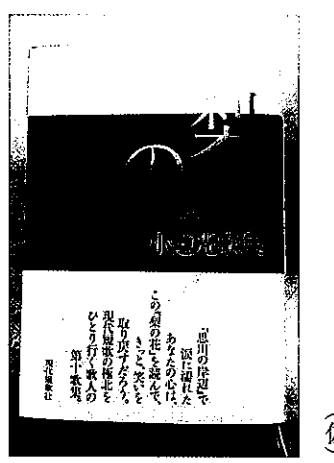
歌集『梨の花』に寄せて

小池光館長のこと

仙台文学館の第二代館長を13年に亘って務めてくださった歌人の小池光氏が、この3月で退任されることになった。友の会では、3月6日に小池館長を囲む茶話会を開催し、ざつとばらんにお話を伺う予定だったが、新型コロナウイルスの感染拡大防止で急きょ中止となつてしまった。そこで、氏の近著『梨の花』をひもとき、その素顔に迫ってみたいと思う。

「唐招提寺の大屋根にあられ散るときは いかなる音す早春にして」静寂そのもの、奈良の風を感じる。 「町角にコントラバスを弾く男 行き過ぎむとしてしばらく聞きぬ」歌集には、音楽が数多く出てくる。チェロ、バイオリン、ジャズピアノ、映画音楽も倍賞千恵子も。

「剪定せしモクレンの木に残りたる純白のつぼみが音たてて開く」花も又多い。 菊、梅、クロッカス、アネモネ、コスモス、木槿、ナノハナ、そして思い出のアガパンサス... 「人間としてだめだからだめなんだ 歌集を閉じてわがひとりごと」歌人として、自分に向き合う厳しさを垣間見る。 「うつくしきシユテファン・ポルツマンの法則をおもひ出すなり初夏のひかりに」科学者としての横顔の見える一首である。 「文学館館長として十年を大過なく来しが大過なきのみ」



(佐)

開館20周年記念特別展 井上ひさしの劇列車II

祈り線・希望行き



待合の椅子にかけて、映像を見る。知っている顔、観たことのある場面、一緒に劇列車に乗った友を思い出す。 最初の駅は「イーハトーボの劇列車」だ。掲示板には「どうか人びとが明るく生きて行くことができますように」という祈りが貼り出されている。胸の中で祈りを繰り返しながら、どんな時でもそう祈れるのだからかと自問する。 「人間合格」に停まった。隠れていた宝石を、井上ひさしは見つけたのか。「これだよ」と差し出されている。

小池光館長退任

初代井上ひさし館長から引き継いで、2007(平成19)年4月から二代目館長を務められました小池光館長が、3月末日をもって退任されることになりました。 小池館長には友の会会員限定の解説講座として、太宰治、石川啄木について、それぞれお話ししていただいたことがありました。また、友の会会報に何度か寄稿もいただいています。

昨年7月の文学散歩では、上山市にある「斎藤茂吉記念館」に同行いただき、バス車中でのお話に参加会員一同笑ったり深く頷いたりしながら聴き入り、現地では会員との親睦の時間を持つことができました。 小池館長、ありがとうございました。 友の会会員も多く受講している「短歌講座」は、2020年度も引き続き講師としてご来館いただけることとです。 後任の館長には、4月から、小説家の佐伯一麦氏が就任します。